

若い曾長わか*しゅうちやうのカイレは、川の近くの小さな村に、妻つまとふたりで住すんでいました。ある日のこと、カイレは、森かへ狩りに出かけました。カイレも妻つまも鹿しかの肉が大好きだいすでした。

カイレが鹿を待まっていると、しげみの中で何かうごが動きました。そこで、ねらいを定さだめて矢はなを放ちました。矢はみごと命めい中して、えものは地面じめんにたおれました。ところが、しげみにかげよって引きだしてみると、それは鹿ではなくて人間にんげんだったのです。

カイレはおどろきました。すると、死しんだ男が口をきいていいました。

「カイレ、おどろくことではない。たしかにおまえはおれを殺ころしたが、わざとやったんじゃないことは分かっている。おれのいうとおりにしてくれたら、おまえをゆるしてやろう」

「いったい、何をしたらいいんです」

「おれの頭を切りとって、家に持もってかえるのだ。胴体どうたいのほうは川にすててくれ」

カイレはいわれたとおり、死んだ男の頭を切りおとし、胴体は川にすてました。そして、頭をふくろに入れてかつぎ、家むに向かいました。歩いていると、ふくろの中の頭がいいました。

「おれに外を見せてくれ」

カイレは、頭をふくろから出しました。すると頭は、

「よし、それじゃ矢をつがえて、あっちのほうに向けて放つんだ」といいました。カイレがいわれたほうへ矢を放つと、カイレには何も見えなかったのに、矢はみごとに一頭の鹿に命中めいじゆうしました。カイレは鹿をかついで帰ろうとして、考えこんでしまいました。

(こいつをかついだら、頭はどうやって運はこんだらいいんだろう)

すると、頭がいました。

「おれはあとから転ころがっていく。さあ、先まへに行いってくれ」

カイレが歩きはじめると、頭はあとから転ころがってついてきました。

家にもどると、妻はたいそうおどろきました。夫おつとのあとから人の頭が転ころがってきたのですから。カイレは、

「こわがらなくてもいいんだ。この頭は何も悪いことをしないから。ぼくの兄弟みたいなものだ」といいました。

妻は鹿の肉を焼き、おかゆをこしらえました。カイレが頭に、「あなたも食べますか」とたずねると、頭はいいました。

「おれが食べる前に、おまえの女房に肉をかんでもらってくれ。おれの歯はもうだめになっっているんだ。おかゆはそのままもらおう」

こうして、カイレと妻は、死人の頭といっしょに暮らすことになりました。カイレはいつも死人の頭といっしょに狩りに出かけ、たくさんのえものをとりました。

二週間たつと、死人の頭がカイレにいいました。

「おれは少しのあいだ出かけなくてはならない。やることがあるのだ。おれを森へ運んでいって、おまえがおれを殺したしげみに置いてくれ。そして、一週間したらまたむかえにきてほしいのだ」

カイレは、死人の頭を抱きかかえると、森へ運んでいってしげみに置きました。

それからの一週間というもの、カイレは、狩りに行っても魚をとりに行っても、一匹のえものにもありつけませんでした。ところが、一週間たつてまた死人の頭が小屋にもどつてくると、*かりゆつとどんな狩人もかなわないほどにたくさんのえものがとれました。

こうして、ひと月ごとに死人の頭を森に運び、一週間するとむかえにいくという日々が続きました。

やがて、カイレにかわいい男の子が生まれました。死人の頭は、狩りに行かないときにはいつも子どもの側にいました。しばらくすると、こんどは女の子が生まれました。

ある日のこと、カイレは川に水浴びに出かけ、妻は小屋の中で仕事をしていました。子どもたちは、草原で遊んでいましたが、そこへ毒蛇がはいよってきて、子どもたちにかみつこうとしました。死人の頭は、すぐに気がついて、蛇に向かってごろごろと転がっていき、蛇と戦いはじめました。

しばらくして、川からもどってきたカイレは、子どもたちの側に死んだ毒蛇を見つけました。蛇は頭がかみくだかれていました。見ると、死人の頭もぐったりしています。死人の頭は、

「蛇のやつにかまれてしまった。毒がすっかり回ったらしい。いいか、よく聞いて、おれ

のいうとおりにするんだ」といいました。カイレはおどろき、

「分かった」と答えました。

「では、おれを焼いてすっかり灰にしてしまってください。灰の中に青い石があるから、そいつを取りだしておまえの娘の首にかけて、お守りにするのだ。それから灰をふくろにつめて森に運び、おまえがおれを殺したしげみにうめてくれ」

カイレはいわれたとおりに、死人の頭を焼いて灰にしました。すると、灰の中に青い石があったので、娘の首にかけてお守りにしました。それから、灰を森のしげみに持っていうめしました。すると、灰をうめた所から、やしの木が生えてきました。

週にいちど、やしの木の下に行くと、カイレは必ずえものがありつけました。ただ、ひと月のうち一週間だけは何もとれませんでした。

それから何年かたちました。娘は年頃になり、たくさんの若者が結婚を申しこみにやってきました。そしてやがて、ある曾長の息子と結婚することになりました。

結婚式の夜、若者が娘の側に横になろうとすると、やみの中に、青く光る物がありました。た。

「首にかけているその青い物はなんだい」と、若者はたずねました。娘が、

「お守りの石よ」と答えると、若者は、

「いや、石なんかじゃない。そいつは魔法の目だ」といって、おそれて逃げだしました。

それからしばらくして、またひとりの若者がやって来て、娘と結婚しました。こんどもまた、結婚式のあと、若者が娘の側に横になろうとすると、やみの中に、青く光る物がありました。

「首にかけているのはなんだい」

「お守りの石よ」

「いや、石なんかじゃない。そいつは魔法の目だ。おこったように、ぼくをじっと見つめている」

若者はそういって、逃げだしました。

いまや、村じゅうの若者が娘をおそれました。もうだれも、娘と結婚しようと思う者はいなくなりました。

何か月かすぎたある日のこと。かたほうの目が不自由な若者が村にやって来ました。

その日は、カイレの家では、ちょうどえもののとれない週に当たっていました。若者はけものの肉や魚を持ってやって来て、カイレの側にすわっていました。

「あなたの娘さんが気にいりました」

「そうか、でも、娘には悪い魔法がかかっている、だれも結婚しようとしなないのだ」

「かまいません。わたしは、娘さんと結婚します」

まもなく、結婚式が行われました。その夜、若者は娘の側に横になって、いいました。

「君の石を見せてくれないか」

娘は、青い石を差し出しました。若者は石を受けると、目のないほうのくぼみにはめました。

つぎの日、夜が明けると、カイレは、妻にいいました。

「あの若者は、ゆうべ、逃げださなかったな。村のやつらとはくらべものにならない、りっぱな若者だ」

そのとき、娘の部屋へやから若者が出てきました。その顔には、ちゃんとふたつ、目がありました。ひとつは青い目でした。若者は、

「お父さん、これからはわたしが狩りに行きます。お父さんはもう働はたらかなくてもいいのです。ただ、月にいちどだけ、わたしはわたしの一族いっかくの所にもどらなくてはなりません。そのときは、この川で魚をとってください。まちがいなく、たくさんの魚がとれるはずですから」といいました。

そして、ほんとうに、そのとおりになりました。

* 酋長 インディアンなどの部族ぶぞくの長。指導者しどしや。

* 狩人 鳥やけものをとって暮らしている人。猟師りょうし。